

家庭に於ける所感 (承前)

長 野 飯塚忠次郎

(十小兒と學齡)

小兒が學齡に達する様になる、即ち學校に行く年頃になると、其準備としてなにかやといろいろと氣をくばらねばならぬ、先づ第一に學校道具そのものであろう、即ち石盤だとか、書籍だとか専ら學校に於いて使用する種々様々な物品を買ひ求めてやらなければなりませんから、親たる人は後で小兒のさしつかへの起らぬように萬事注意深くやつてほしいので御座います、それで受持となるべき教師を訪問し、或は學校に行つて問合せて、教師となる人のさしづに依つて必要な道具を買ひあたへてやらねばなりません、小兒のいひなりはうだいに買ひ求めてやらぬ様になさいまし。此

の地球上にふぎやあといつて母親のたいないから生れ出でてから、親の恵に依つて楽しく數多の歲月を平穩無事にけいくわしてこゝにはちめて一つの樂園ともいふべき學校に入ることであるから、小兒のよろこびは勿論親の日頃のたんせいも之によつてみることができて、親たる人の御胸中はさもどんなで御座いましょうか、私達のとうていそうぞうのできない程でありましよう、人生に於いて種々快樂は御座いますけれど實にこれにこした愉快はありませんまい。スマイルスが、かように申された事が御座いましょう「徳育を施すべき初の場所」は家庭其次は學校、終は社會であつて、吾人は必ず此の三大學校の經過せざるべからず」と、實に家庭の必要な場所なることは今更ことあたらしく申迄もない、今や學校に入らんとする小兒

は丁度此の三大學校の第二門に入らんとせるものでありますから、何事も古人の申されたとうり始めがいちばんだいちで御座いますよへ、何卒此の好機をとりはつさず充分教訓の任をつくされたいのです。

扱て之等の學校道具は最も丁寧に大切に取扱はせることの習慣をつけて、學校でつこふしなものは何の區別なく自己の智を啓き進める道具で御座いますから、いひかへれば寶であるのです、これあるがために學問をして智徳を増進することができるといふことを、平素からよく話して置いて實行させねばなりません、それから他方面には儉約の風をも教へる、たとへて申そうならば紙がいくらあつたからとてむやみにあたへぬように、むだづかいをさせぬ様に、紙ばかりにかぎつた事は御座

いませんどのようなつまらぬものでも皆な幾分づゝの人の手数をへてをります、つくつた人のほねをりがこもつてゐるものであるから大切にせねばならぬことを一家の人々がさきにたつてやつてみせて、よいお手本を示さなければいけません、いくら口先きで小兒に教へたつてだめです、やつてみせるのがだいいちです、みなさんも本紙の第四卷第六號でいそつぶ物語にあつた親子の蟹といふのをよみになつたでしょう、まことにあのとうりです、小兒を教導するには自分からして動かねばなりません、またはたらかねばいけません、口先でばかりやかましく教へたと、をこないによつて教へたことがらとは、小兒發育上に大なるさいが生じて行きます、之れ最も小兒を教導する其人のちつこうすべき點で御座います、わるいたね

をまいといてよきしうかくを得たいといふことはたいへんなまぢがひで、何事によらずよいことをやれば従つて良果があらはれてまゐります、こゝにいふぐわいで御座いますから學校へ小兒が行くようになつたなら大に教導のためひたすらつくされたいのです。

まゝ世間でさいいた事で御座いますが今は一寸小兒を學校へやればといつてもなかなかたいへんで、色々な學校道具をかひもとめてやらねばならぬ、そればかりか太郎のならつた書物を二郎、三郎にゆずらうと思ふと教科書の改正とくる、子供の多いうちみたいなどころではとても、こんなに幾種も買ひ求めることは出来ぬと、こんなことをいふてゐるお方があるそうです、表面的からよく觀察したなら種々な家庭の事情から思はずしらずこん

なぐちがでるかもしれぬが、學校に小兒をやるのは何のためですか、學校は將來我國をけいえいする、小國民をようせいする神聖なる場所ではありませんか、あすこの兒も學校に行くから世間のまへもあるしそれに學齡にも達してゐるからやろうぐらいな考へで學校にやる人があつたとしたならごくきけんなものと存じられます、其様なお方の小兒をあづかつてゐる先生は甚だめいわく、そんな單純なる考へをもつてゐられる家庭であつてはどうてい完全なる教育をその小兒にほどこすといふことはできぬ、學校の主意と家庭の教育とあいまつてこそはじめてよいけつかが得られる、學校でゐくら教師が火の様になつて熱心に教へてやつても、家庭でみづのようにつめたくてはだめである、教育の主義、學校の今日世に存在する眞意を

よくざとられたい、教育の價值はどこにあるやといふこともよくしつてほしい、年はうつつて、國ありてためしなき新年は來ました、軍國多事のさい一層斯道のためにつくされ以て完全なる國民をつくられたるので、それには少年時代が最もゆるかせにすべからざるときで御座いますから、進んで小兒教育のためうでをふるつていたゞきたいのであります

(未完)

## 若菜籠

其子

▲我が古郷に狂句などに長じたる男ありけり。年の始の朝の宮参りの道に、友なる神官に出遭ひて「先づ御慶、去年のはらひは如何にぞや」と問ひしに、神官即座に袖かさ合はせて、

「はらへどつもるかり衣の雪」

五十

と答へたりしこそ、可笑しかりしか

▲これも、全じ所にての話なり。さる婦人、夢に珊瑚の玉の二つに割れたりとみて、詮なき夢を見たるものかなと、兎角に思ひ煩へるを聞きて、ある人

さんごじゆで、二つにわれば七つ半

七福神より半分上なり

と咏みて與へければ、此上なく喜びて、心を安んじたりといふ。

▲我が妻をよぶに愚妻といふ。之を英語に譯して my foolish wife といはひ、如何ばかり、可笑しからん、我が子をよびて愚息、豚兒などいふも同様なるべし。

▲妻持てる男の、或日訪ひ來りて、こま／＼しき